京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都 ㊀8111 ㊁2054 学内直通 2441
振替・京都3909
（1部 20円）

加茂川の畔
新館きよす
旅館 清州
新入生歓迎コンパに ご相談承ります
（本館）
河原今出川電停前
TEL（231）1750～8776
（新館）
寺町通今出川上ル
TEL（231）5121・5122

6・15首都 政府中枢へむけ実力闘争

渋谷で権力の壁に激突

6・14六統一行動の圧倒的な結集をかちえ、六月十五日は、政府中枢へむけ、大学に対する長期ストライキ、工場からの反乱を背景とした実力闘争がくりかえし、展開された。一方、闘争を「追悼」に終わらせてゆく部分もあり、七十年闘争の課題は、この日、もっとも凝縮されて、提出されたといえるだろう。

六・十年安保闘争の国会突入へ、標美智子追悼の日から、十年を経た六月十五日、六月安保決戦「五・一五」を中心とする七十年代闘争の突破口として、十年間の闘争の総括をかけて闘われた、渋谷駅付近から国会、首相官邸などの政府中枢へ向けての実力闘争は、十四日の代々木公園の七万二千名という戦闘的大衆集会を、「国会」周辺に至って遮断することはできなかったが、幾度か機動隊の壁を鉄パイプ・角材で武装してあるいは強固なスクラムで突破する熾烈な闘争を展開した。

二時四十分から、東大駒場に結集し集会をもった東大全共闘、京大全学スト実を中心とする各大学全共闘の学生約千名のうち約五百名の突撃隊は、六時まえに駒場を出発し、そのうち二百五十名は井の頭線の線路上を神泉駅に向い、残りの部隊は、かけ足で街路をぬって神泉駅から道玄坂方向にジグザグ的に登場し、道路上にバリケードを構築し、機動隊と一進一退の攻防にはいった。このころ、弾圧をうけて、一定の分散を余儀なくされた部隊は、一帯の路地に少数づつ集結し、それぞれ神泉駅、道玄坂方向に向った。

また別に、午後三時頃から都内各所に集結をはじめた、フロント、反帝学評、共学同の部隊約五百名は、六時に全員ヘルメット＋鉄パイプ・角材で武装して井の頭線神泉駅に現われ、同駅から道玄坂に向った。このとき、駒場から線路づたいに来た全共闘部隊もそれに合流し、渋谷に向けての実力闘争を展開。また、街路を乱打的に進んだ全共闘部隊も、途中で、火炎ビン・石を手にいれ、これに加わった。

まず部隊は、六時過ぎに武装部隊を先頭に、道玄坂に到着し、これを即止しようとした機動隊十名を完全に撃破し、さらにつづいてさし向けられた機動隊をも敗走させ、道玄坂一帯を制圧した。また、付近の交番は火炎ビンで破壊された。この後、道玄坂で全共闘部隊もまた、約三千名にわたり、火焔ビン・石とガス弾の応酬による激突がつづいたが、次第に増員される機動隊に押され、百数十名が不当逮捕された。分散した部隊は、渋谷駅付近へ行く部分と、駒場に再結集する部分とに分れ、それぞれが闘争を持続した。駒場に再結集した約百五十名の部隊は、さらに山手通りや井の頭線などにバリケードをつくり、国会へ向うとしたが機動隊に阻止された。また、この部隊は、約百五十名の頭線は渋谷駅まで、デモをかけ、デモが行なわれた。

参加者総数は約四万人、動員された側・私服の警官、機動隊は全国で四万六千人で、全国で二百九十一人を不当逮捕した。

包囲網を破って実力デモを貫徹しようとする労働者の隊列（渋谷・宮下公園）

全国で二九一人が不当逮捕

十五日には首都における実力闘争を中心として全国四十二都道府県百九十ヵ所で集会・デモが行なわれた。

参加者総数は約四万人、動員された側・私服の警官、機動隊は全国で四万六千人で、全国で二百九十一人を不当逮捕した。

全国で二九一人が不当逮捕

十五日には首都における実力闘争を中心として全国四十二都道府県百九十ヵ所で集会・デモが行なわれた。

参加者総数は約四万人、動員された側・私服の警官、機動隊は全国で四万六千人で、全国で二百九十一人を不当逮捕した。

東大（駒場）で集会

実力闘争を意志統一

「追悼集会」と訣別して

六月十五日、東大駒場学部（駒場）において「七〇年安保粉砕、六・一五全東大学総決起集会」が開催され、午後五時からの政府中枢へ向けた実力闘争への決起が意思一致された。

この日、十四日の闘争の後、第二本館に泊り込んでいた東大全学スト実・駒場共闘は、民青系学生のヘゲモニーによって確立された「六・三中核」による十五日～二十三日「安保条約破棄・沖縄即時無条件全面返還闘争」を粉砕し、駒場キャンパスを制圧する中で、午後二時四十分からの労学総決起集会（参加した、集会は、駒場九自治教室において全国各地から結集した各大学全共闘、東大病院反戦を中心とする労働者、浪人、高校生ほか当日の実力闘争を提起している各帝大学評・社会主義学生戦線（フロント）の学生・労働者、約千名が結集して行なわれた。

東大全闘、駒場共闘、東大教職員六闘争委、京大全学スト実、浪共闘の他、駒沢大、教育大、東外大、都立大、日本女子大、上智大、千葉三大学の学生からの発言がなされた。十五日の全共闘を中心とする大衆的集会としては唯一のこの集会において、「六月二十三日をもって発動される七〇年安保・日米反革命同盟反同盟の開級制度をボイコットして突破し更にその制度をボイコットの政府中枢に向けた力をもっての政府中枢に向けた闘実の闘争を、革命的労働者運動とそれと同調した学生運動とが一体となって突出させる中で、プロレタリア統一戦線と地区プロヒモ・の確立基礎を機軸する実践闘争として、六月闘争を『決戦』として闘う」ということが基調的に発言された。

また六・二五闘争を「標美智子追悼集会祭」として一般的なノンセクトアンピ流して行こうとする中核派、「反平連の部分に対しての大衆的弾劾集会祭」として「追悼は実力でもって」と機動隊の壁を突破し、国会・首相官邸突入闘争を提起している。

東大駒場における「六・一五全東大学総決起集会」で、反帝学評、フロント、駒場共闘の実力闘争部隊との結合を図りつつ、首相官邸・国会・外務省庁に向けた戦闘的・大衆的デモンストレーション

（首相官邸・国会前）―日比谷公園で既可されたが、終始機動隊の壁を突破しつつ戦闘的デモを展開した。

渋谷道玄坂上における反帝学評、フロントの街頭バリケード実力闘争と結合し交差点で十五分間、うず巻きデモを展開し、更に部分的には規制していた五〇人余りの機動隊の壁をスクラムで突破し、まだそれを過ぎた後、フランスデモをだけるとなった。そして、渋谷付近では、約三百人の機動隊に一人一人検問・身体検査され隊列が混乱しつつも隊列を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。官邸へ通ずる道、国会前においては、二度、三度と切り返し突入を試みる。日比谷公園からデモに出発した中核派は、デモ隊を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。官邸へ通ずる道、国会前においては、二度、三度と切り返し突入を試みる。日比谷公園からデモに出発した中核派は、デモ隊を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。

「社・共共闘」成立す

全通は不参加を決定

6・23都首

六月二十三日を「歴史的な日」と位置づけ、当日の共闘を、七〇年代民族民主統一戦線構築のスルクマールとしている日本共産党の実質的なヘゲモニーによって、十六日、六・二三中央集（会）における「社・共共闘」の成立が決まった。

これまで、社会党、総評系は、六月安保闘争として、二十二日の中央集会を予定、これに対し、二十三日の中央集会を予定していた共産党は、当日の集会を「社・共共闘」による集会にたいして、社会党は、六〇年安保闘争との条件の違いを強調、この申し入れを拒否していた。

この後、社会、共産両党、総評、平和委員会などの関係諸団体、個人（学者、作家など）の間で協議が続けられた結果、十六日、共産党の主張がほぼ全面的になおり、二十一日の社会党、総評の中央集会と別に、二十三日に社、共両党参加の中央集会開くことがきまった。

この集会の統一スローガンは①安保条約の継続に関する党声明」を発表し、「日米安保条約を相当長期に維持する」ということを「自主防衛の努力」を含めて、「昨年末の総選挙での国民的合意を得ている」として強調した。

党声明の要旨は

一、わが国の独立と平和を守るための国防の基本としての自主防衛と日米安保体制によって激動する国際情勢の中で、わが国の平和と安全、国民生活の向上に向けて平和外交の展開、自主防衛の努力、日米安保条約の適切な運用を三位一体として進める。

というもの。

これは昨年十二月の日共共同声明による「七二年沖縄返還」の確認を実質的な日米安保の自動延長として十二月の総選挙により国民的合意を取りつけたとする日本ブルジョアジーの七十年代の世界支配体制の中での重要な位置を占めると自負しつつ、帝国主義間の激烈な貿本競争を遂行してゆく一つの宣言であろう。特に「自主防衛を主に、安保体制をその補完として」という方向は未だ全面に表現していないが、四・五反防、国防会議改組計画、国家安全保障委の設置計画などが一方で進行しつつあり、「平和と繁栄、国民的利益」の名の下で帝国主義ブショナリズムを「吹いしく」解釈してゆく階層、特に小ブル各層が、「平和外交」としてアジア後進国を独自経済圏に包摂していくとする日本ブルジョアジーの姿勢がうかがわれる。

自民党は十九日、「日米安保条約の継続に関する党声明」を発表し、「日米安保条約を相当長期に維持する」ということを「自主防衛の努力」を含めて、「昨年末の総選挙での国民的合意を得ている」として強調した。

党声明の要旨は

一、わが国の独立と平和を守るための国防の基本としての自主防衛と日米安保体制によって激動する国際情勢の中で、わが国の平和と安全、国民生活の向上に向けて平和外交の展開、自主防衛の努力、日米安保条約の適切な運用を三位一体として進める。

というもの。

これは昨年十二月の日共共同声明による「七二年沖縄返還」の確認を実質的な日米安保の自動延長として十二月の総選挙により国民的合意を取りつけたとする日本ブルジョアジーの七十年代の世界支配体制の中での重要な位置を占めると自負しつつ、帝国主義間の激烈な貿本競争を遂行してゆく一つの宣言であろう。特に「自主防衛を主に、安保体制をその補完として」という方向は未だ全面に表現していないが、四・五反防、国防会議改組計画、国家安全保障委の設置計画などが一方で進行しつつあり、「平和と繁栄、国民的利益」の名の下で帝国主義ブショナリズムを「吹いしく」解釈してゆく階層、特に小ブル各層が、「平和外交」としてアジア後進国を独自経済圏に包摂していくとする日本ブルジョアジーの姿勢がうかがわれる。

保・安自動延長

自民党が声明

「国民的合意成立」と

自民党は十九日、「日米安保条約の継続に関する党声明」を発表し、「日米安保条約を相当長期に維持する」ということを「自主防衛の努力」を含めて、「昨年末の総選挙での国民的合意を得ている」として強調した。

党声明の要旨は

一、わが国の独立と平和を守るための国防の基本としての自主防衛と日米安保体制によって激動する国際情勢の中で、わが国の平和と安全、国民生活の向上に向けて平和外交の展開、自主防衛の努力、日米安保条約の適切な運用を三位一体として進める。

というもの。

これは昨年十二月の日共共同声明による「七二年沖縄返還」の確認を実質的な日米安保の自動延長として十二月の総選挙により国民的合意を取りつけたとする日本ブルジョアジーの七十年代の世界支配体制の中での重要な位置を占めると自負しつつ、帝国主義間の激烈な貿本競争を遂行してゆく一つの宣言であろう。特に「自主防衛を主に、安保体制をその補完として」という方向は未だ全面に表現していないが、四・五反防、国防会議改組計画、国家安全保障委の設置計画などが一方で進行しつつあり、「平和と繁栄、国民的利益」の名の下で帝国主義ブショナリズムを「吹いしく」解釈してゆく階層、特に小ブル各層が、「平和外交」としてアジア後進国を独自経済圏に包摂していくとする日本ブルジョアジーの姿勢がうかがわれる。

「社・共共闘」成立す

全通は不参加を決定

6・23都首

六月二十三日を「歴史的な日」と位置づけ、当日の共闘を、七〇年代民族民主統一戦線構築のスルクマールとしている日本共産党の実質的なヘゲモニーによって、十六日、六・二三中央集（会）における「社・共共闘」の成立が決まった。

これまで、社会党、総評系は、六月安保闘争として、二十二日の中央集会を予定、これに対し、二十三日の中央集会を予定していた共産党は、当日の集会を「社・共共闘」による集会にたいして、社会党は、六〇年安保闘争との条件の違いを強調、この申し入れを拒否していた。

この後、社会、共産両党、総評、平和委員会などの関係諸団体、個人（学者、作家など）の間で協議が続けられた結果、十六日、共産党の主張がほぼ全面的になおり、二十一日の社会党、総評の中央集会と別に、二十三日に社、共両党参加の中央集会開くことがきまった。

この集会の統一スローガンは①安保条約の継続に関する党声明」を発表し、「日米安保条約を相当長期に維持する」ということを「自主防衛の努力」を含めて、「昨年末の総選挙での国民的合意を得ている」として強調した。

党声明の要旨は

一、わが国の独立と平和を守るための国防の基本としての自主防衛と日米安保体制によって激動する国際情勢の中で、わが国の平和と安全、国民生活の向上に向けて平和外交の展開、自主防衛の努力、日米安保条約の適切な運用を三位一体として進める。

というもの。

これは昨年十二月の日共共同声明による「七二年沖縄返還」の確認を実質的な日米安保の自動延長として十二月の総選挙により国民的合意を取りつけたとする日本ブルジョアジーの七十年代の世界支配体制の中での重要な位置を占めると自負しつつ、帝国主義間の激烈な貿本競争を遂行してゆく一つの宣言であろう。特に「自主防衛を主に、安保体制をその補完として」という方向は未だ全面に表現していないが、四・五反防、国防会議改組計画、国家安全保障委の設置計画などが一方で進行しつつあ

反平連

「毎日デモ」

べ平連は、六月一日から三千日まで、「毎日デモ」を行なう方針を決め、清水谷公園から新橋まで、多数の市民、学生を結集して、デモンストレーションが行なわれている。とりわけ、二十一日（日曜日）には、五千人が集まり、国会前まわり込みなど、ゲリラ的な闘争も含めて、大衆的に闘われた。

東大（駒場）で集会

実力闘争を意志統一

「追悼集会」と訣別して

六月十五日、東大駒場学部（駒場）において「七〇年安保粉砕、六・一五全東大学総決起集会」が開催され、午後五時からの政府中枢へ向けた実力闘争への決起が意思一致された。

この日、十四日の闘争の後、第二本館に泊り込んでいた東大全学スト実・駒場共闘は、民青系学生のヘゲモニーによって確立された「六・三中核」による十五日～二十三日「安保条約破棄・沖縄即時無条件全面返還闘争」を粉砕し、駒場キャンパスを制圧する中で、午後二時四十分からの労学総決起集会（参加した、集会は、駒場九自治教室において全国各地から結集した各大学全共闘、東大病院反戦を中心とする労働者、浪人、高校生ほか当日の実力闘争を提起している各帝大学評・社会主義学生戦線（フロントの学生・労働者、約千名が結集して行なわれた。

東大全闘、駒場共闘、東大教職員六闘争委、京大全学スト実、浪共闘の他、駒沢大、教育大、東外大、都立大、日本女子大、上智大、千葉三大学の学生からの発言がなされた。十五日の全共闘を中心とする大衆的集会としては唯一のこの集会において、「六月二十三日をもって発動される七〇年安保・日米反革命同盟反同盟の開級制度をボイコットして突破し更にその制度をボイコットの政府中枢に向けた力をもっての政府中枢に向けた闘実の闘争を、革命的労働者運動とそれと同調した学生運動とが一体となって突出させる中で、プロレタリア統一戦線と地区プロヒモ・の確立基礎を機軸する実践闘争として、六月闘争を『決戦』として闘う」ということが基調的に発言された。

また六・二五闘争を「標美智子追悼集会祭」として一般的なノンセクトアンピ流して行こうとする中核派、「反平連の部分に対しての大衆的弾劾集会祭」として「追悼は実力でもって」と機動隊の壁を突破し、国会・首相官邸突入闘争を提起している。

東大駒場における「六・一五全東大学総決起集会」で、反帝学評、フロント、駒場共闘の実力闘争部隊との結合を図りつつ、首相官邸・国会・外務省庁に向けた戦闘的・大衆的デモンストレーション（首相官邸・国会前）―日比谷公園で既可されたが、終始機動隊の壁を突破しつつ戦闘的デモを展開した。

渋谷道玄坂上における反帝学評、フロントの街頭バリケード実力闘争と結合し交差点で十五分間、うず巻きデモを展開し、更に部分的には規制していた五〇人余りの機動隊の壁をスクラムで突破し、まだそれを過ぎた後、フランスデモをだけるとなった。そして、渋谷付近では、約三百人の機動隊に一人一人検問・身体検査され隊列が混乱しつつも隊列を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。官邸へ通ずる道、国会前においては、二度、三度と切り返し突入を試みる。日比谷公園からデモに出発した中核派は、デモ隊を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。

京大全学スト実 東大全共闘など

防衛庁―官邸―国会

実力闘争と呼応して 戦闘的デモを貫徹す

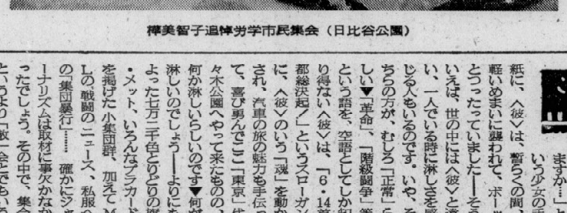
相官邸へ向けた進撃でしかなしえない」ということが発言された。

集会後、五時四十分ごろ、雨の降りしきる中を、東大全共闘、京大全学スト実を中心とする全共闘大衆部隊と、反帝学評、フロント、駒場共闘の実力闘争部隊が結合し、交差点で十五分間、うず巻きデモを展開し、更に部分的には規制していた五〇人余りの機動隊の壁をスクラムで突破し、まだそれを過ぎた後、フランスデモをだけるとなった。そして、渋谷付近では、約三百人の機動隊に一人一人検問・身体検査され隊列が混乱しつつも隊列を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。官邸へ通ずる道、国会前においては、二度、三度と切り返し突入を試みる。日比谷公園からデモに出発した中核派は、デモ隊を整え、首相官邸・国会へ向けて進撃した。

また、べ平連は、四時から約五百名が日比谷公園で集会をもち、日比谷へデモを行なった後、再び日比谷公園で約二百名が集会を行なったが、その後解散。学生インタビュー約百名が国会前のデモを乙四時から日比谷公園で集会を行ない解散、共学戦も、約五十名が五時に親衛公園で集会をしたあと、防衛庁前をデモし、日比谷で解散。協会派は約二百名が清水谷公園での集会の後、日比谷までデモ、などと、それぞれ実力闘争を展開しすず、闘争の昂揚はほとんどみられなかった。

また、べ平連は、四時から約五百名が日比谷公園に集り、国会に向けてデモをはじめたが、機動隊に解散させられ、その後、清水谷公園で集会、六時半ごろから、新劇人反戦も含めて約二千名で国会に向かってデモをだそうとした国会前で流れ解散した。また衆院議員前門前では、約三百名づつの献花デモをくり返した。別に、この日の実力闘争を渋谷付近で展開した解放派の別部隊約百名は、地下鉄銀座駅から国会へ向かおうとしたが、教育戦構付近で機動隊と激突、投石をしつつ突撃したが阻止された。このとき、三十四名が不当逮捕。

また、十五日午後五時半から、東京、小金井市の多摩墓園で、約一時間にわたり、標美智子さんをしのぶ「墓前祭」が行なわれ、その後、約百三十名が墓地から国電武蔵小金井駅までデモを行なった。


標美智子追悼労学市民集会（日比谷公園）

6・21―23

再度の大統一行動へ

十四日の六・統一行動、十五日の実力闘争の後、各大学全共闘、各党派ごとに「六月闘争」が闘われていたが、二十一日から二十三日にかけて、再度、結集がはかられる。二十一日十時から、代々木公園において、社会党・総評系の反安保集会に対し、解放派を中心に介入闘争が行なわれ、デモの先頭にたつ予定である。二十二日には国労、動労の反安保政治ストが決行されるが、中核派、革マル派は清水谷公園で、解放派は宮ヶ谷公園で、支援集会を行なう。

また、二十三日、六時から、明治公園（あるいは練川公園）で全国反戦・全国全共闘連合などの主催により、六月最後の大統一行動が行なわれ、再度、政府中枢へむけた実力闘争が展開されるものと思われる。一方、革マル派は全国動員で、国会・首相官邸突入闘争を提起している。

こくばん

「冰」い時、貴方は一体何をしていますか…」といった女の手紙に、〈彼〉は、暫らくの間、軽いめまいに襲われて、ポーッとつったっていました――そういえば、世の中には〈彼〉と違い、一人でいる時に冰しさを感じる人もいるのです。いや、そちらの方が、むしろ「正常」らしい▼「革命」、「階級闘争」等という語を、空語としてしか知り得ない〈彼〉は、「6・14首都総決起」というスローガンに、〈彼〉のいう「冰」を動かされ、汽車の旅の魅力を手伝って、喜び勇んでここ「東京」代々木公園へやって来たものの、何か冰しいらしいのです▼何が冰しいのでしょう――よりにもよった七万二千色とりどりの旗・メット、いろんなプラカードを掲げた小集団群、加えてMLの「戦闘の二ュース、私服への集団暴行……。確かにシャーナリズムは報道材に事欠かなかったでしょう。その中で、集会というより「祭」会でもいうべき、各人の意志をベクトル表示したら、演壇に全てが集中しているのではなく、向きがバラバラで中にはゼロベクトルも混じっているという風な状態の中で、雑然として続けられる党派の演説を聞きながら〈ハ聞く〉、漠然としかできぬ自分に対し、冰しさを感じているのかも知れません――そして〈彼〉は「消耗」な顔をしながら、「恍光」を貧いに行くのです▼無二の下での「大集会」の後、部隊別のデモ行進の際、「冰」れた〈彼〉は、何を考えたでしょう？――行くか、帰れるか、雨が降るか、傍でこういいます――「帰れるか降る」かじゃなくて、「降ろす」か「降らす」かだ……。（祐）

6・15首都

国会への献花行進

「追悼集会」と「墓前祭」

十五日、実力闘争を闘争した中核派、共産同、学生インター、共学戦、社青同協会派などに結集する交通遮断し、規制する機動隊の動きに気配に密着して、「安保粉砕」「実力闘争」「中核攻撃」「機動隊粉砕」などのシュプレヒコール、ゲリラ的なデモンストレーションをくり返した。この強大な大衆の執拗な反撃に対して機動隊は為すすべもなく、右往左往するばかりで、渋谷駅一帯の大衆による制圧は午後七時すぎまで約四時間にわたった。

また、宮下公園に再結集し、集会を行なった反戦派労働者の部隊約二百五十名は、午後七時半に、同公園の入口を封鎖していた機動隊の阻止線を一度にわたってスクラムで突破し、再度街頭で実力デモを展開したが、遂に圧倒的な量の機動隊の波状攻撃の暴力によってデモ隊列をずたずたされ分散させられ、機動隊と対時して深夜まで集団闘争を行なった後、七時から約三千名を結集して「六・一五十周年標美智子追悼労学市民統一集会」に移った。この集会のはじめに、代表百名が標さんの遺影四つを先頭にして国会への献花行進に出発した。

集会は、献花行進の帰還を待って、八時半から、国会前、銀座を通るデモに移った。途中、国会前で機動隊とぶつかり、ガス弾の発砲を受けつつ、またアメリカ大使館前で突如数十名が不当逮捕されたりは、終局、機動隊に規制を受けたデモをとれない、十時過ぎに八重洲口付近で流れ解散した。

ほかに、この日、防衛庁突入の実力闘争を打ち出していた共産同は、三時に約三百名が明治公園で集会をもち、日比谷へデモを行なった後、再び日比谷公園で約百名が集会を行なったが、その後解散。学生インタビュー約百名が国会前のデモを乙四時から日比谷公園で集会を行ない解散、共学戦も、約五十名が五時に親衛公園で集会をしたあと、防衛庁前をデモし、日比谷で解散。協会派は約二百名が清水谷公園での集会の後、日比谷までデモ、などと、それぞれ実力闘争を展開しすず、闘争の昂揚はほとんどみられなかった。

また、べ平連は、四時から約五百名が日比谷公園に集り、国会に向けてデモをはじめたが、機動隊に解散させられ、その後、清水谷公園で集会、六時半ごろから、新劇人反戦も含めて約二千名で国会に向かってデモをだそうとした国会前で流れ解散した。また衆院議員前門前では、約三百名づつの献花デモをくり返した。別に、この日の実力闘争を渋谷付近で展開した解放派の別部隊約百名は、地下鉄銀座駅から国会へ向かおうとしたが、教育戦構付近で機動隊と激突、投石をしつつ突撃したが阻止された。このとき、三十四名が不当逮捕。

また、十五日午後五時半から、東京、小金井市の多摩墓園で、約一時間にわたり、標美智子さんをしのぶ「墓前祭」が行なわれ、その後、約百三十名が墓地から国電武蔵小金井駅までデモを行なった。

社会科学のインパクト
●経済学の未来を求めて
K・ボールディング著　A5判上製／四八〇円・〒70
本書は、アダム・スミス以来の伝統的な経済学の限界を指摘し、諸科学の総動員なしに現実の社会システムを最適化することは不可能であると結論する。経済学に新しいフロンティアが開かれるとすれば、それは他分野との接点においてであろう。これからの複雑な時代を洞察するために、このボールディング社会哲学は有効な知的武器となろう。　犬田／武者小路／吉村訳

大規模時代の終り
●多元化する産業組織
中村秀一郎著　ダイヤモンド現代選書　A5判／五〇〇円・〒70
わが国の産業社会は、すでに脱工業化社会へ移行しつつある。そこにおける産業の研究開発・集約性の強化とシステム化の傾向は、大企業体制の意義を改めて問い、スケール・メリット論の発想を根底からゆるがしはじめている。本書は、現状分析にもとづき、日本型産業社会の可能性を探った待望の書である。

変貌する日本経済
三宅武雄著　A5判／一九二頁／九〇〇円・〒90
GNP第2位の日本経済は、当然その構造が大きく変化してきた。その日本経済の変貌を産業構造・規模構造・地域構造の面から展望した。ますます大問題となりつつある物価・労働・生活・国際化の問題を、金融・財政政策をめぐって検討し、わが国の経済政策の現状ととるべき方向を示唆する。豊富な図と表を駆使した日本経済入門書

★70年代を迎えた新しい経営学の体系的提示！
現代経営学全集〈全16巻〉
第一巻／第一回配本
現代の経営　高宮晋著　上智大学教授
A5判上製箱入／一五〇〇円・〒120
高度産業社会において、現代の経営はどのように変貌し、どのようなあり方をとり、どのような原理で動いているかを、企業編・経営編・組織編・経営システム編の構成で明らかにしながら、現代の経営を基礎的・歴史的かつ体系的に解明する。

序章　2号
5月1日発売・300円
武装蜂起
蜂起に関する覚え書……佐野茂樹
〈赤軍派〉から赤軍へ……八木健彦
パルチザン闘争……暉峻章
文学
1 短編〈人間〉……奥野路介
2 ロマンの復活……稲垣真美
身構える変革の視点
現代青年論……八木
革命的サンディカリズム試論……大塚俊樹
女衒考……池田浩士
ラズールカ（訣れ）……工藤正広
京都大学出版会・北海道大学出版会

未来を指向する新しい総合誌
流動
7月号発売中！　¥180
動乱を生き抜く7人の七人
周恩来、ジエンマ・アラネタ、朴正熙、ロン・ノル、モクター・ルービス、陳嘉庚、永野重雄
横行する恐慌不安に応える倒産ラッシュの心配はないか　金森久雄監修
ドキュメンタリー・ブックレット
一九七二年六月二十二日
〈科学〉地上の酸素が減っている
好評連載・日本人研究④宮城県人
◆今月のミスカレッジ・青山学院大学・浅野裕子
東京都港区芝愛宕町1-3（第9森ビル）（株）流動

評論社
現代世界映画
佐藤忠男著　過去十数年にわたって、著者が堂々と書きつづけた世界各国の映画の評論を整理しまとめたものである。●付録・現代世界映画の200選　四六判 520頁　¥1200
産業心理学
J・ティフィン他著　正戸　茂他訳
世界で最も権威ある産業心理学の最新版。新データを駆使し、現代の産業行動科学の基礎理論と実践を解説した名著の訳　A5 690頁　¥3000
諸科学と心理学
J・ピアジェ著　芳賀　純訳　人間の思考の発達には論理・数学的構造が認められ、それは子どもの思考発達過程の研究から発見しうるとした著者の講演の翻訳　B6判90頁　¥400
読書人の小雑誌「ぱれるが」を送呈
〒101 東京都千代田区神田神保町2－16
振替東京7294　TEL東京03(265)1961～4

淡路闘争委

「大長征」を貫徹

淡路島―首都―三里塚―砂川―富士市

六月十二日より十七日までの五日間、独自の地域闘争を担っている淡路闘争委員会（淡闘）は京大全学スト全体的に貢献すべく、「大長征」を計画し、精力的な活動を展開した。

この淡闘の「大長征」の目的は六月闘争を単に中央でのガンバニア集会、または「大学の機能化」である一定期間、停止させるだけのものにさせないために、自らの問題意識をもって京大の全学学生に行動提起を行ない、京大全学ストの内容を保証していくためであった。そしてこの地域闘争（淡路闘争シンポジウム）が公害研究会・工学部戦線及び地域闘争バルチザン（淡闘・淡闘）の主催で約三百名の参加をもって行なわれた。スローガンとして「全国公害闘争勝利・学園から地域戦域へ・淡路軍事空港建設阻止・富士公害闘争勝利・日帝の社会総再編阻止」が提起され議論としては畠野芳郎氏（技術問題評論家）・氷井満氏（淡路町国際空港反対期成同盟）・甲田寿彦氏（富士市公害対策市民協議会長）・吉村功氏（名大工学部助教授）が参加した。

シンポジウムは、主催者側からこれまでの公闘争の経過報告及び問題提起がなされ次いで議論に移った。淡路の永井氏からは六年よりの運動の経過が説明され、淡路国際空港建設の八月内定の声を前に、これからの半年間の闘争が極めて重要な意味をもつことを確認点として提起した。次いで富士の甲田氏からは、現在の富士市の「大昭和製紙の企業城下町」といわれる現状と闘争経過の報告の後、今まで「かち得てきたもの」が歩的勝利に過ぎないことを強調した。

次いで名大の吉村氏は、水俣病等における研究での状況を説明するとともに、地域闘争における態度に対し、問題提起を行ない、自らは戦理論の研究における「とを強調した。

学の問題氏から、現在の大学での工学は特権的生産を実向するものであるという前提のもとでは、現実に、カリキュラムの中で公闘争に取り組む可能性があり得ないことを指摘した。

続いてシンポジウムは討論に移り、研究者・学生の公闘闘争に対する姿勢について三時間余り意が交され、最後に、地域闘争をより全国的なものへ、発展させていくことを確認して第一回公闘闘争シンポジウムは終了した。

6・15

京大・同大で集会

ストをふまえ活発な論争

六月十五日、京都においても「全国西学生総決起集会」が同志社大学において行なわれ、拳固の中約六百名の学生を中心に約六百名が結集して午後三時半より行なわれた。

同志社大学での集会に先だち、京大では「全京大総決起集会」が午後一時過ぎより法経一番教室で行なわれた。この集会には京大全学スト実の学生約三百名が結集した。集会では、各学部の代表から闘争報告と挨拶演説が行なわれた。そして、最後に十年前の同日に国会南通用門で虐殺された樺美智子さんの遺を悼んで二分間の黙祷を行なった後、さきだって行進、同志社大学に向った。

「全国西学生総決起集会」は、同志社大学博徳館内で、同志社、京大の学生を中心に約六百名が結集して午後三時半より行なわれた。

実行委員長に京大文学部闘争委員会・学友会の代表と同志社大法学部共闘闘争委員会の代表が選ばれた。発言は、最初に全京都スト・ライキ闘争委員会の学生が行なった。その中では「まず十四日の東京の闘争は革命戦争の任務を放棄した不十分なものであった。いわゆるへ新左翼〉は七十年代の権力闘争が激化している新しい権力を提起できず、八人民戦線〈共産〉としてしか働いていない。われわれスト闘は七十年代の反戦闘争の権力闘争と統一戦線をかちとり、中央権力闘争から最の前記に至で進展させなければならない。本日の闘争をその突破口としようではないか」と述べた。「新しい闘争形態」の内容は語られなかった。

次に花園大学全学共闘会議・花園大学ストライキ闘争委員会から「花大では十一日の全学学生大会で全学スト・ボイコット・ボイコット・ボイコット

昂揚の中の混沌

全国全共闘連合の階級的再編を

「六・一四」東京の代々木公園に代々木、千人という労働者、学生、高校生、市民の人の波で埋めつくされた。それは、七〇年六月安保「決戦」の一大頂点として設定された大統一集会であり、全国民戦、全国全共闘連合はもちろん、六月行動委員会を中心とする無数の市民団体、そして革マル派をも含めた「新左翼」諸潮流の巨大な共同行動であった。

六月安保闘争は、六〇年代闘争の一切の収約を、とりわけ六七年十・八羽田闘争以来明白かれた実力闘争の地平と、その波及上にある、六八・六九年全国学園闘争、そして昨秋第安保決戦の「敗北」過程の実践的総括として、全共闘・反戦派労働運動として現象した、あのボウ大な自然発生性の限界性を対象化する中から、昨秋安保決戦で

六月闘争がその頂点として突出させていたものは何であったか。六〇年代階級闘争、とりわけ六七年以降の反戦・反安保闘争の実力闘争的展開が切拓いた地平を、更に深化させるべく、あるいは全共闘運動、反戦派労働者の明確な登場に示されるような、膨大な自然発生性を、それが内在させている限界性を抱えきる中から、権力を転覆する革命を提出しようとする。6・14、15闘争の報告として、実践的総括へ迫るものを提出したいと思う。

（編集部）

かちとられたところの地平を、いっそう深化・拡大させ、七十年代階級闘争の基本陣型を準備しうるかつつある。全軍労に対する大量解雇、沖縄基地の再編成・レッドパージ、沖縄の国政参加案の成立、沖縄人民の闘いのアルジェリア革命的情況の進展にともなう、米帝のアジアへの反革命軍事介入、それに呼応する形での「アジア会議」への日帝の参加とアジアにおけるイニシアティブの奪取、この両者には、「単一な世界市場の深化」の一点をみつめ

かが、この六月闘争に問われているのである。

昨秋の日米共同声明以降、日米帝国主義者は一方において、沖縄のコプルジョア的返還」を強制しつつある。全軍労に対する大量解雇、沖縄基地の再編成・レッドパージ、沖縄の国政参加案の成立、沖縄人民の闘いのアルジェリア革命的情況の進展にともなう、米帝のアジアへの反革命軍事介入、それに呼応する形での「アジア会議」への日帝の参加とアジアにおけるイニシアティブの奪取、この両者には、「単一な世界市場の深化」の一点をみつめ

命闘争同盟の再編成化という戦略展開がめられて切り、そのもとなるものとして沖縄返還をテコとした日本帝国主義のアジアへの侵略がある。

そして、一方においてアジアへの侵略にみあう形での、国内政治社会秩序の帝国主義的再編が進行しつつある。沖縄への自衛隊派遣を軸とした、自衛隊の帝国主義軍隊化、中教審答申・初等教育の改編などを通じた教育の帝国主義的再編、病院移転問題に代表される医療の営利事業化、出入管体制、朝鮮高校生への暴行等を軸に形成されつつある帝国主義排外イデオロギー、そして東大裁判、石田発言などに代表される司法権力のファッショ化。

この様な情況下において、われわれの闘いは、もはや「歩も後退できぬものとしてあり、現実的にこの六月に、どのような団結を構築しどのような闘いを発出させるのかが問われていたのである。

京大においては、昨年九月京大決戦以降、国家権力の眼の前に一定程度分散化せざるを得なかった闘うエネルギーを、十一月教養部動員して一定の結集をかちとり、教養部における政治ストライキを

原自然に対する恋慕

徹底的な破壊の衝動へ

ぼくたちの原自然に対する恋慕は時としてそれと異質なものに対する徹底的な破壊の衝動を生むものだ。車に乗って遠い旅行出かけた夫婦は現代社会の中を無力な生を強いられている個人と無関係な問題との接点であったようだ。生産力の発達と不可分な交通手段の発達は全世界の空間を縮減して行った。それと共にかつて存在したあらゆる文明を輕蔑し、世界史の最頂点に立っている現代文明は今なおアジア・アフリカに現存する自然生産様式・共同体を絶滅して地球の全表面の征服へと突進する。自動車の族水はそのような現代文明を支える資本家的生産様式の一つのシンボルであろう。空間を征服する手段としての自動車の、空間に対する敗北はウィークエンドを飾る一つのモチーフである。

この世界史的変革を負った現象の供えものとしての人間の血にこれでいいのか、しょせんと世やそうな単なるエューマニズムをゴダールは待ちあわせていないし、さらにぼくをよろこばせることは、この世界の流れをさかのぼってゆくことである。だれかさんが「暴力」とか「コロテイジズム」とか呼ばれられるの映像はむしろぼくの夢海さみの世の流れをスムーズにし、硬直した胸懐を快くさせた。

アレキサンドル・デュマと神との間に生まれた男は「キリスト教は自己犠牲の担者である」と言った。大衆を正当にも殺行したのに、この者は別に何も感じなかった。最後まで無自覚だ。神やマルクスや阿弥陀ナポレオンも力なく見えた。物神のアタマである。この天縄には絶対的普遍色もあるが、彼らは神聞たちの所へ帰れと言われると単車へ乗ろうとする。自分たちの足で歩きながら、ギリシヤ神話のパンの神からこの「人神」の間に生まれた男は「キ

雨中、首都における果敢なデモ

木の枝と共に育まれた生をむさぼり、血と汗はその手段と化した。しかしぼくたち人類の生産的表現である血と汗は自分は世俗的潤滑にとって何か間違えるものとして冒涜される。

分業の開始としての潤沢労働と再体労働の分離は、意識をして大なる空想力を獲得せしめる。そしてこの意識は自分を現実世界の解釈から解放し、「純粋理論・神学・哲学・道徳などの形成へと移行した。中世ヨーロッパではそのようなものとしての神学が現実世界をののたうちまわった。既存の生産関係に属する生産力との間の矛盾が世界史的現象をうみ出してゆく。ぼくたちは現在、鉄クズと高層ビルと法の中に奪われ去った自然をむなしく魂の中や海の岸へ捜しに行く。しかしそこではぼくたちが出会うのは自然総体から自分を言葉で人間を絶し引いたところの仮象である。ぼくたちは海のにおいと共に人類の血のにおいを感じ緑色と生臭のステージの上での民族の叫びと共に宇宙に浮かんだステージの上での人類の苦活動を見なくてはならない。歴史で変ってゆく風景の中で歴史の何世紀もが一瞬のうちに過ぎてゆくことをエゴゼールは知っている。

ウィークエンドの解放感は疎の中でドラマ化されていない。なまいきにもマシンゲンを持って、ぼくたちは「ルポルタージュ」のブルジョアのアナクロのニヒルさ、ぼくたちは、ぼくたちは、ブルジョアジーのための通俗文学を用意している。（文）

闘争委員会運営と位置づける部分の対立を内包していた。そして、昨秋の政治決戦の過程で、全国全共闘としては「実力闘争を組織しえぬまま、政治決戦を、「軍事」という全国的な共同闘争機関をかちとれなかったことの総括と、十一月以降、教養部において展開された「寒流」闘争の止揚をかちとれなかったことを踏まえつつ、この六月を「六月闘争委員会」として闘ってきた。

実質的闘争状態にあった全学共闘会議（以下「全学ストライキ実行委員会」）「全学ストライキ実行委員会」という不充分な形とはいえ構築しえたという、団結の発展をみるとともに、五・二九全関西労学集会」等で、はっきりと鮮明しつつ、六・二全学大会を三千名を動員し、七十年代闘争の総路線を集会に、六・五「全関西総決起

シンポジウム

価値論と歴史認識

□第二回□

平田清明

去る五月十六日に、われわれ京大新聞社の主催により平田清明氏を招いて行なったシンポジウム「価値論と歴史認識」の内容を、前回（六月八日号）に続いて掲載する。

シンポジウムは、平田氏の報告と全体討論からなっているが、今回は報告の第二回として、「ロシアマルクス主義の反省」という論点を中心に掲載した。

マルクス主義方法論の検討の一環として、すでにわれわれ編集部がとり組んできた紙上シンポ「市民社会と社会主義」に引続き、平田氏の問題提起に関する読者諸兄姉による検証を期待する。（編集部）

報告

社会、国家の概念の混同

歴史の三段階把握の再考

世界的個人への発展

人格的依存関係の実現を

I. ロシアマルクス主義の反省

ロシアのマルクス主義はレーニン主義の名の下に、ロシアの革命を、他の諸思想に先だち大々と共に実現させた点は、たしかにロシアの革命でありました。

このロシアの革命において、何らかの位置を占めたマルクス・レーニン主義、後には、すべてがこれによって指導されたと感じされます。そのようなものではありえないことは、他のいかなる歴史過程を通ずした場合でも明らかです。もしもそのように簡単に、ひとつの思想が、ひとつの政党が全てを指導できたというならば、おそらく歴史というものは、ある全人的な政治家が指導する単純明快な過程になってしまうと思います。

ロシアについても同様です。ロシアにおいて、このマルクス主義がレーニン主義として実践的勝利を得たことは、この事実は偉大なことであり、そこから学ぶべきものの多くの問題は、平田氏の報告とを体討論からなっています。チェコ事件の核心もそこにあります。

国家の最高決定機関が最高ソヴィエトであるはずであるにもかかわらず、党中央委員会または幹部会という

ものが、別の次元で、実質的にはより高い権限をもって最高の政策を決定し、それを単に承認する儀礼機関としてのみ議会＝ソヴィエトがあることは、これは、ソヴィエトの存在に対する冒瀆であります。人民の闘いの、人民の生活全体の発展としての社会主義に対する冒瀆であることは、全歴史的証明しているところであります。ロシア人自身がその呪縛のなかにおかれていることが、私混合とも思います。

プロレタリア独裁の問題についても、同わねばならぬことがありますが、私はそこに論点があるということだけを指摘して、つぎに移りたいと思います。

二番目に、ロシアにおける問題は、社会と国家の区別が明確ではないこと。つまり、非西欧的、非市民的な社会において、マルクス主義がレーニン主義の名のもとで、指導的な役割を果すことによって、かえって、この区別が不明確になったことです。

私ども日本人も、感覚で社会と国家との区別ができておりませんが、日本列島という地理的条件で、日本語という唯一のことばをしゃべり、そして絶えざる統一政権のもとにあったこの国では、国家と社会とは混ざるということについての実感がないのです。おのれの政治的意見または利害が国家の政策と異なるときには、ちがう国家で生きていくというようなこと、あるいは、ちがう土地の人間ことばの全く通じない人間に対してことばを通じ合わせようとする努力を統一したことがないのです。国家と社会との区別が、アジアにおいてはっきりと不明確であります。

後でも述べますが、社会と国家との区別は、国家独占資本主義の段階において西ヨーロッパにおいてさえ、ますます、曖昧になってきました。サムエルソンのいう、ミクスト・エコノミー（公私混合経済）の体制を現代ではあります。

ロシアにおける問題は、国家と社会との不十分な区別の上に、国家と社会との新たな結合が意識的に進められ、そこには奇妙な混同が発生したことです。しかしマルクス主義は、市民社会と国家との分離を市民社会の撤廃、国家の跳絶という同時テーマにおいて、克服しようとするものであるはずです。

三目番の問題は、ロシアの革命の条件が、第一次大戦の過程にあったということ、そしてその後の帝国主義諸国による反革命干渉戦争に耐えねばならなかったという事です。戦争による破壊と反革命との戦いのなかで、異常な努力を強いられたことが、ロシアのマルクス主義に重大な理論的欠落が生まれた外的な条件です。

その欠陥はいろいろあります が、所有論の欠如がまず指摘されます。とくに、"個体的所有"という概念の欠落であります。"社会的所有"とマルクスがいったのは、「個体的所有の再建」という意味なのであります。マルクスは、個体的社会的所有といっているのです。

ロシアのマルクス主義は、マルクスにおける"個体的所有"を知らずして、"社会的所有"だけを採用したのであります。（ヘ氏デューリング論」においてエンゲルスが述べた「生産手段の社会的所有と商品貨幣手段の私的所有」ということが、その証拠であります。）

社会的所有を国家的所有といういわば政治的概念におきかえて、問題を発展させたのは、国家が所有するのだから、その所有の内容たるところ古有、すなわち生産手段の活用が、国家官僚とその中枢を握るところの党官僚の操作対象になってしまいます。国家的所有をもって社会的所有の内容だと把握したところに問題があるのです。そしてこれが、ロシアマルクス主義の全秘密だといってもよいのです。

人格とは何か。人格とはペルソナ、すなわちギリシャ悲劇における仮面であります。仮面というのは、人生の舞台、歴史という舞台に登場する人の眼、人の声であり、それこそが人格、ペルソナであります。しかし、人格という概念は、位格＝人間の存在の有力、位相を意味してある人間の存在、というものを含んでいます。マルクスにおいては、人格の概念、この二つの内容があるのです。

そして、この人格の物象化を解くことこそがマルクスの課題であったのです。特に、価値論しくは商品論といわれるものは、これを論証するための現論なのです。

私がこういうと、何か奇異な感じがする人もいるかもしれません。しかし価値論とか商品論とかいうものは、もともとマルクスにあっては、歴史の理論的把握のなかから生れてきたものであり、歴史の認識における人格の在りかたを問うた現論なのです。この意味で歴史現論なのです。

マルクスは、歴史を把握するにあたって、共同体と市民社会の区別と関連に焦点をあわせて、段階的把握をこころみます。

〈図を参照〉

ローマでは、その共同体に固有に内在する私的所有が私的個人の社会を生み出しています。そこには、市民社会が、ただ共同体の基盤のうえに成立しているという意味で、旧来市民社会が形成されています。

ゲルマンにおいては都市形成は、やはり、旧市民社会の形成であります。これらの社会が基礎としてもっている共同体を解体することによって、近代市民社会が現われることになるのです。社会主義もまた、近代市民社会の展開の上に展望されるのであります。

マルクスは、歴史を基礎的に三段階の展開として把握しようとしております。すなわち、共同体の時代、近代市民社会の時代、そしてコミュニズムの時代がそれです。いうまでもないことですが、階級なき社会と階級的社会の区別は、マルクス主義において決定的に重要でありますが、この区別を真に理論的に追求するためには、このような把握が実に基礎的に重要なのです。

『経済学批判要綱』の「貨幣」章においてあらわれる、歴史の三段階把握は、次の通りです。

第一段階、共同体の時代。それは人格的依存の関係によって特質づけられます。人格的依存とは、親子・夫婦・兄弟というような関係において、人間の具体的な活動・労働の内容が直接に他者のためのものであると同時に自己のものである、ということです。

第二段階、市民社会の時代。その特質は人格的非依存の関係です。この人格的非依存は、人格的自立を象徴するものであり、物象的依存が媒介されているのです。この社会では、商品と貨幣、労働力商品と資本の販売と購買という交換の過程で、諸人格が直接に結びあっているのです。

マルクスは、市民社会の特質をこのように引き出すことを通じて、商品は貨幣を生み出し、貨幣は資本に転変することを証明したのです。そこで明らかにされたのは、日常の生活において人は個々的には依存しないが、しかし大資本的に社会的に依存するということであります。

市民社会の直接的なあり方は、人格的非依存であり、物象的依存性であります。このことが意味しているものは、商品の価値において物象化していることの、人間の生産のその足下において、人は、共同の生産を営んでいるのです。価値という抽象物、そしてその対象的表現である貨幣を出現する姿、強められてしまっているけれども、実は共同の生産を人は営んでいるのです。この共同的関係を生産関係というのであります。

市民社会の交通様式は商品交換という関係を取りながら、底面では、価値を生産するというかたちで（可能的に）結びついている人格と人格との抽象的な関係が、存在するのです。

このことを語ることのなかった価値論学者あるいは広く経済学者の誤りは、新たな献史理論研究の地平において、数年のうちに明らかにされると、私は思います。

マルクスが問題にしたのは、この底面にある生産関係でありました。

市民社会の諸点、分業の発展は世界市場の生産を生み出し、協業の発展は世界市場の生産を生み出し、大社会共同生産をつくりあげていきます。この過程を通じて、人は目に見えない不可視な人格的依存関係を両面見るのです。

資本主義の発展のなかで、労働過程が協業的性格を深め、そこでの動労諸個人の類的＝共同力能の発揮が実感され、しかも、労働過程と教育過程とが社会的に統一されていくと共、本来の人間の像が見えてくる。それまが、解放への途なのです。諸矛盾の否定的な爆発を通じて、肯定的なものが未来を創ってゆくのです。

その未来とは何か。物象的依存の撤廃であり、人格的依存関係の直接的実現であります。しかも、労働過程が世界的交通の展開としての未来社会を呼びよせるものとして現存しているのです。これ「そ」が「要綱」貨幣章に明示されているマルクスの歴史把握なのであります。

マルクスは、この共同体→市民社会→コミュニズム、すなわち、狭隘な人格的依存→普遍的な物象的依存→普遍的＝世界的人格の再建という歴史把握を、『要綱』において書きとめたのであります。

そこから、階級社会の特殊なあり方が、根底的矛盾の運動形態＝変革または移行の条件を決定するものとして反省されるのです。

ロシア・マルクス主義の反省。それは、以上述べてきたように、まさに世界史の認識の反省であるほかはないのであります。ブハーリンやオイゲン氏の悲劇あるいは喜劇を繰り返さぬための理論的な努力が、私たちに必要なのであります。（つづく）

黒板を使用しての講演

150名の学生を前に報告を行なう平田清明氏

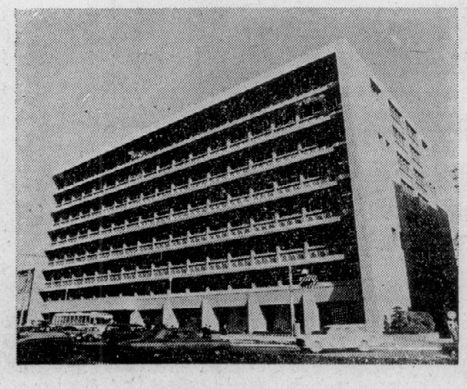
ひらたきよあき氏は現在、名古屋大学助教授。著書は「市民社会と社会主義」など。

経済学と史的唯物論

階級社会、人類の前史（生産と所有との分離）

- 共同体（生産と交通との結合）
  - 共同所有
  - 私的所有と私的所有との対存・対立
  - アジア的共同体 ⟷（転変）アジア的専制国家＝絶対的奴隷制（唯一の所有者＝絶対者）
  - ローマ的（古典古代的）共同体 旧市民社会（私的所有） ⟷（転変）奴隷制
  - ゲルマン的（封建的）共同体 旧市民社会（私的所有） ⟷（転変）農奴制
- 市民社会（生産と交通との分離）
  - 私的な（個体的）所有
  - 近代市民社会（近代的私的所有） ⟷（転変（否定））資本制（他人の不払い労働にもとづく資本家的領有）
  - 否定の否定
- 無階級社会、人類の真の歴史（生産と所有との結合）
  - 共同所有にもとづく個体的所有
  - 自由人の連合体（生産と交通の再結合）
  - 社会主義社会（自己労働にもとづく個体的所有、社会主義的協業＝社会的所有）
  - コミュニズム社会（個体＝社会の全面開花、無限の富の噴出、労働概念の揚棄）

政策と産業を結ぶ
日本開発銀行



開銀（カイギン）は——
新しい銀行です
政府と民間を結ぶ
金融のパイプです
人材を育成する
銀行です。

創立　昭和26年4月
貸付残高　1兆5,609億円
資本金　2,340億円
従業員　1,056名

就職についてのお問い合わせは
東京都千代田区大手町1－9－1　〒100
本店人事部人事課　TEL 03(270)3211
または各支店総務課まで

ひとりぼっちで淋しいとき……
おしゃべり仲間と会ったとき……
もちろん恋をしたとき……
静かでゴージャスな
純喫茶　ケルン
1F　761－4570　京・銀閣寺道電停前

レジャービル
銀閣のホトリ散歩して……
四人そろへば……唯だまって
意気の合う奴が集る……
廉価で魅力一ぱいで（コーヒーサービス付）
麻雀センター
2F　761－1872
ケルン

本格派……
おとな感覚とエレガンスな
フィーリングで
ユックリ楽しめる
高級ビリヤード
3F　761－3874

ぼくたちに残されたコミュニケーションの
可能性に参加せよ！
◆ 便利で廉価な定期購読を
購読料　1年分　550円　2年分　1000円　4年分　1750円
（郵送料は1年分につき 150円）
当社振替口座　京都 3909
学内唯一のマス・メディア
京都大学新聞
京都市左京区吉田本町京大西部構内
TEL075（761）2054　直通
075（771）8111内線2441

3階 美術書（絵画・工芸・デザイン 映画・演劇・音楽）
2階 専門書（人文 思想・歴史 法律・経済 政治・文学 理工）
1階 新刊書 小説 全集 雑誌
営業時間 11 AM－9 PM
読書と思索と行動する君へ
もっと本を！ そして
＜攻撃的知性＞を君のものに！
さまざまな音響が語りだす本のギャラリー
京都書院
四条河原町上ル　TEL（221）1062（代）